



# GRAND PRIX

—グランプリ—

Free

フリー部門

ベストプロダクト賞

野沢浩道さん

NOZAWA Hiromichi

[チイサナフデバコ]

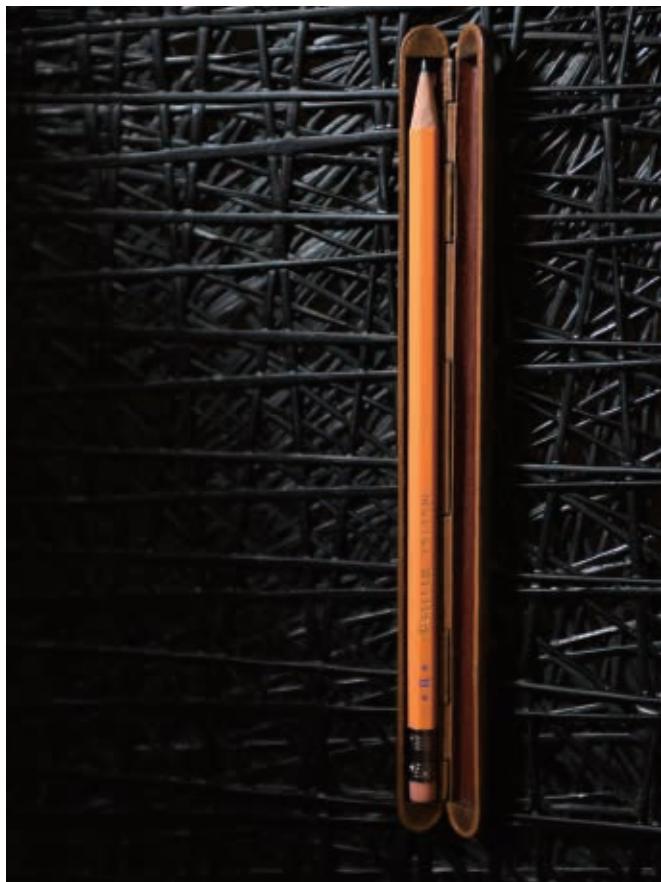
個人

受賞作品詳細は  
こちらへ



受賞者動画を  
配信中！





## デジタル全盛時代に フィジカルの大切さを問う

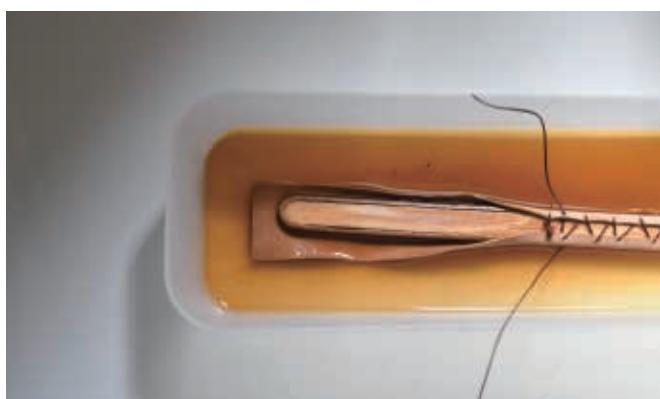
一見すると木の棒に見えなくもない。その実体は、鉛筆一本がぴたりと収まる革製の筆箱だ。作品名はストレートに「チイサナフデバコ」。サイズこそ小ぶりだが、抜群の存在感を放つ。佳作のそろった「ジャパンレザーアワード2022」において、見事グランプリを獲得した。

「部門やカテゴリーで入賞したいという願望はありましたが、まさかグランプリ受賞とは未だに信じられない気持ちです」

そう語るのは、受賞者の野沢浩道さん。職業は歯科開業医。革の持つ「自由さと曖昧さ」に惹かれ、余暇を使って革製品づくりをしている。

「ジャパンレザーアワード」へのエントリー経験も豊富だ。一度、すべての部門に作品を提出したことがあるが、「その年の応募作品展でほかの作家さんの作品を見てクオリティの高さに驚き、このままでは駄目だと痛感しました。それからは、一つひとつの作品にテーマをもうけ、より真剣に向き合うようになりました」。

とりわけ受賞作のコンセプトは明確だ。デジタルガジェットが普及した世の中において、あらためてフィジカルを駆使する重要性を問うている。



上／ヤスリのみで整形したヒノキを木型として使うシンプルな革絞り。下／野沢さんが大好きなスペシャリティコーヒーで革を染色。色付きと香り、一粒で二度楽しめる効果あり

「紙に字を書く、あるいは絵を描く機会が減っている現代において、あらためて手を動かす大切さを見直し、文具の可能性を追求しました。シンプルかつミニマムな作品にしたかったので、できるかぎり材料と手間を端折った結果、鉛筆一本のみを収納するサイズになりました」

野沢さん自身、プロダクトを構想する際には鉛筆でデッサンを描く。身体感覚を伴うアウトプットの意義をしかと心得ているようだ。

シンプルでミニマム  
だから想像力をかきたてる

作品のベースとなるヌメ革は、最低限の強度を維持できる厚みに。木型を使用して立体成形し、Ni-Tiワイヤー（ニッケル-チタンワイヤー）のヒンジを取り付けた。「当初は細い真鍮の棒を通してみましたのが、強度が足りず歪み、その部分が膨らんでしまうため、弾力性があり変形しないNi-Tiワイヤーを使いました」。ちなみにこのワイヤーは、歯科矯正で用いるケースもあるという。

味覚以外の感覚に訴えるのも大きな特徴だ。軽くて心地よい手触りはいわばもがな。使用した鉛筆が短くなって空くスペースは、思考によって脳を使った目安となる。小型の隠しマグネットによる開閉時の音は小気味よく、ふんわりと鼻腔をかすめるコーヒーの香りは気分を落ちつかせる。

「今回の革はお気に入りのスペシャリティコーヒーで染めてい



染色と研磨を繰り返し、木や石などの自然素材に通じる質感に。ヒンジ部分には強度と柔軟性を併せ持つNi-Tiワイヤー（ニッケル-チタンワイヤー）を使用している

ます。通常の染料よりも色付きがよいことに加え、大好きなコーヒーの香りがほんのりとるので、より身近に置いておきたいプロダクトになったと思います」

ひとつのプロダクトを長く手元に置くことは、無駄な所有と消費を減らすことにもつながる。「チイサナフデバコ」は、モノを所有することの意味を深く考えさせてくれる。

### 「ジャパンレザーアワード」へのエントリーは今後も継続

まったくの独学で創作を続け、快挙を成し遂げた野沢さん。革を使ったものづくりについて、柔軟な顔つきで次のように話す。

「作品づくりをしている時間は、仕事を終えたあとの息抜き、気持ちの安らぐ大切なひとときです。リラックスした時間に構想をかたちにしていく作業は、いまや人生に欠かせません」

そんな野沢さんだが、今回の受賞を「ジャパンレザーアワード」への参加の区切りにするつもりはない。

「『ジャパンレザーアワード』への応募は、僕の年間目標のひとつになっています。今後は各部門およびカテゴリーにおける受賞を目指し、シンプルでミニマムながらもそれ以上の何かを感じられる作品をつくっていきたいと思います。いまは趣味の範疇ですが、将来的にはプロダクトを市場に送り出したいですね」

野沢さんの夢が叶う日は、そう遠くないのかもしれない。





## Foot Wear フットウェア部門

ベストプロダクト賞

### 宮内 崇さん

MIYAUCHI Takashi

[ InTi (インティ) ]

アトリエ路地の家

受賞作品詳細は  
こちらへ

受賞者動画を  
配信中!

神戸牛の“生きた証”に最敬礼！  
太陽の力で色の変化を表現

「革を保管している時に、表面に出ていてる部分だけ日に焼けていることがよくあって。おもしろいなって思ったのが作品づくりのきっかけです」

一般的には、保管時の一部変色はマイナス要因として捉えられかねない。しかし宮内さんは、これにスポットを当てた。「日焼けで模様を描いてしまおう、そう思いついたのが2年ほど前です」。前例がないからこそ、挑戦したいという気持ちは高まったという。「段階的に濃淡を表現する『迷彩柄』に挑戦し始めました」。

少しでも焼けやすい革をと、相談をもちかけたのが姫路の「オールマイティ」。小ロットからオーダーメイドで革をなめしてくれるタンナーだ。リクエストに応え、少しでも日焼けしやすいタンニンを提案してくれたという。そのやりとりの中で宮内さんが出会ったのが、神戸牛だった。「『神戸牛』

と聞けば、誰もが食肉だとすぐにわかる。その革を使って作品をつくれば、説明なしでも、副産物の有効活用だと理解してもらえるって思ったんです」。なめしが難しく、通常は廃棄されてしまうことが多いという神戸牛の皮。オールマイティのなめし技術の力を借り、宮内さんはこれをスニーカーに昇華させたのだ。

「ヒールには、牛の『個体識別番号』を刻印しました。神戸牛全頭に付与されているものですが、これこそ牛が生きていたという証だと思って。なんらかの形で刻みたいと思いました」

ベロ部分にはつなぎを入れて立体的な仕上げに。また紳士靴ではあまり見られないクッションパットを入れたり、ソール部分はオパンケ製法\*で修理しやすい構造にするなど、設計面でも随所に工夫が見られる。コンセプトと技術が共に光る、究極の一足だ。

\*ソールをアップバーに被せるように縫い付ける製靴方法



上／日焼け前には、革にオリジナルブレンドのオイルを塗る。下／切り抜いた型紙を使って表現する迷彩柄



上／遠隔採寸できるシステム「iD-FOOT」。下／快適に履ける靴をつくるためには、木型制作が欠かせない

## デジタル技術で遠隔採寸、 伝統と革新で実現する 新時代ビスポーク

「LIGHTBULB（ライトバルブ）」は、靴職人の外林洋和さんと、義肢装具士の野口達也さんから成るユニット。足を採寸し、その人に合った一足をつくるビスポーク（オーダーメイド）で、野口さんが木型を削り、外林さんが靴に仕上げる。これまで対面接客でないと難しかったこの製法を、LIGHTBULBでは、スマホカメラを利用して足を採寸するシステム「iD-FOOT」を活用することで、遠隔地からのオーダーも可能にした。伝統を尊重しつつも、新しい技術を組み合わせることで、これまでの靴業界にはなかった可能性を模索しているのだ。

ふたりの出会いはわずか1年ほど前。SNSでお互いの存在を知り、「きちんと足を知ったうえで靴をつくる」という想いを同じくする者として意気投合した。

受賞作品は、一見クラシックなパンチドキャップトウ\*のドレスシューズ。しかし、「素材には、『ジビエレザー』というちょっと珍しい革を使用しています。これは国内で捕獲され、肉は食用に処理された動物の皮をなめしたもの。そのコンセプトに共感して選びました。今回はあえて、テクスチャーのあるイノシシをチョイス。色も赤味がかったブラウンで特徴付けています」と、外林さんは話す。ここにも「伝統×革新」というテーマが込められているのだ。

「今後は、僕たちふたりだけで完結するのではなく、いろんな職人さんを巻き込んでいきたいと思っていて。そのコミュニティのプラットフォームとしてLIGHTBULBがあればいいなど。それぞれが得意な技術を生かしていいものをつくり、きちんとしたお代をいただく。そんな活動を通して、日本の靴業界を盛り上げていくことが、いま一番の野望ですね」

\*トウに一文字の穴飾りを施した紳士靴のデザイン

## Foot Wear フットウェア部門

### フューチャーデザイン賞

## 外林洋和さん

SOTOBAYASHI Hirokazu

### [ビスポークシューズ ver 2.0 ～伝統技法×最新技術で挑む世界市場～]

LIGHTBULB

受賞作品詳細は  
こちらへ



受賞者動画を  
配信中！





## Bag バッグ部門

ベストプロダクト賞

### 中野義夫さん

NAKANO Yoshio

#### [ “リム”トート ]

Wish Born

受賞作品詳細  
こちらへ

受賞者動画を  
配信中!



偶然出会った「リム」から想起  
デザインと確かな機能性が  
同居するトートバッグ

今回の受賞作品「“リム”トート」は、印象的なタイヤの「リム」と出会ったことで生まれたと話す中野義夫さん。「車で出かけた時、お茶屋さんに寄ったんです。そうしたらそこに、ゴリゴリリーゼントの兄ちゃんがいて、駐車場にひとりわ目立つ車が（笑）。案の定、彼が乗り込んだんですけど、その助手席にいたのが……、おばあちゃんやったんです。優しい子やん！と思って、ふとその車のタイヤを見ると、リムの部分がびょんと飛び出していた」。これにひらめきを得た中野さん。鞄における「捨てまち」を、このリムのようにわざと立ち上げるというデザインを思いついたのだ。「捨てまちというのは、この鞄の側面のように通常でも外側に、立ち上がった形状になっています。それを本作では、底の片面のみを大きくせり出すようにデザインし、

そこにブランドロゴを刻印しました」。

持ち手が長く、男性でも無理なく肩から掛けられるため、ショルダーベルト別付けの必要なし。左右どちらの肩に掛けた場合も、スマホなどの小物がスムーズに出し入れできるよう、両側の見返し部分にポケットが設けられている。機能性の面でも、綿密に考え抜かれているのだ。「革は、硬すぎず経年変化も楽しめる、クロムとタンニンのコンビなめしのステア\*。普段からお世話になっているタンナー、近所の『大谷皮革』さんにお願いしました。色も『こんな感じ』ってなんとなくのニュアンスを伝えれば、いつもいい感じに仕上げてくれるので助かってます」。

夢は90歳までものづくりを続けることだという中野さん。「広島の傘職人のおじいちゃんが、90歳を超えてなおミシンを踏み続けていたんです。そんなふうになれば本望だと思います」。

※生後数ヶ月後に去勢して肥育した雄牛の革



上／大きくせり出した捨てまちにブランドロゴが。下／いつまでもミシンを踏み続けていたいと中野さん





河本さんは、皮革工芸の伝統的な技法や素材にオリジナリティを加え、独自のスタイルを確立している

### 温故知新のものづくりで 革の多様な魅力を伝える

「私の創作の原点は、15年前に足を運んだ『東京レザーフェア』です。展示されている革の種類の多さ、その加工技術に驚いたことを、きのうのことのように覚えています。こんなにも多彩な革があるのに、その存在が世の中には伝わっていない——。そこで、多種多様な革が醸し出す魅力を作品に落とし込み、表現してみたいという思いが芽生えました」

そう語るのは、バッグ作家の河本静香さん。受賞作の「千色革籠」には、色も質感も異なるバラエティー豊かな革を使っている。これらはすべて端切れ革だ。

「今作のコンセプトは、端革の有効活用。余った革をテープ状に裁断して継ぎ合わせ、ひとつのバッグに仕上げています。少ない分量の革で制作できるうえに、手編みで高価な機械を必要としないため、非常にSDGs的な作品であるといえます」

革を編み込んでいくうえで欠かせないのが芯材の存在だ。

「型崩れのしない芯材と一緒に革を編み込んでいるので、腰折れしにくく使いやすいバッグに仕上がっています。編み込みタイプのバッグは経年で型崩れしやすいものなのですが、この製法であれば長く使っていただけます」

また、あざやかな配色も人の目を引き付ける。

「製造する工程で一番時間をかけているのは配色です。一つひとつの革が生きるように、絵を描くように編み込んでいます。事前におおよそのパターンを決めてから編み始めるのですが、配色のバランスが好ましくなったら一度ほどき、再び編み直しています」

一連の製法は、使い古した布を細く割いて使う伝統織物「裂織」を連想させる。河本さんの芸術や工芸に対する造詣の深さが、温故知新のものづくりにつながったといえそうだ。

### Bag バッグ部門

#### フューチャーデザイン賞

## 河本静香さん

KOUMOTO Shizuka

せん いろ かわ かご

[ 千色革籠 ]

sunao

受賞作品詳細は  
こちらへ



受賞者動画を  
配信中!





## Wear & Goods ウェア & グッズ部門

ベストプロダクト賞

### 矢内 徹さん

YANAI Toru

#### [ カスタマイズウォレット ]

株式会社 吉田 製作部



お札入れ、小銭入れ、パスケース  
ヘアピンを活用した  
斬新な組み立て型ウォレット

「パスケース一体型の財布を探している知り合いがいたんです。窓がついていて、中に入れた定期が見える形のものですね。でも今の時代、改札で駅員さんに定期を見せることがほとんどなくなったこともあり、パスケースが付属した財布がものすごく少なくて。それでつくったのが、今回の作品なんです」。矢内徹さんはそう話す。この作品の本体は、3つのパートで構成されている。まず、カード入れのポケットがついたお札入れ。これ単体で二つ折り財布として使用することもできる。そこに、付属できるバージがふたつ。ファスナーで開閉する小銭入れと、知人のリクエストにあった窓つきのパスケースだ。小銭入れとパスケースも、お札入れと同様に単体でも使うことができる。注目すべきは、この3つのパートを組み立てるための留め具だ。「ヘアピンを使っているんです。お札



上／ヘアpinを使って簡単に着脱可能。下／吉田では製作部に所属。主にサンプルづくりなどの仕事をする

入れを折りたたむ中央の部分にスリーブ、小銭入れとパスケースの端にはそれぞれ隙間を設けていて。そこに両側からヘアpinを差し込むことで、取り付けられるように仕立てました。こういった誰でも簡単に手に入るものをうまく利用することが、個人的にすごく好きなんです。安価なものを、上等品の中でさりげなく生かすというか。その手があったか！って思ってもらえたなら本望ですね」。

使用したレザーは、革自体の表情を残した上質なカーフスキン\*。「吉田の商品でも使うことは多いんですけど、このカーフは薄くすいても銀面にハリがあって、しっかりとした質感が特徴です」。床面がきれいに処理されていることもあり、裏地に生地などは使用していない。

「ちょっとしたアイデアで、世の中の人気がちょっとだけ幸せになったら……。そんな想いで、これからもものづくりを続けていきたいと思っています」

\*生後6ヶ月以内の子牛の革



Free フリー部門

フューチャーデザイン賞

## 蔡 弘灝さん

CAI Honghao

### [混沌]

CAI芸術スタジオ 株式会社

床革を味わい尽くす  
レザーの魔術師が目指した  
シンプルの極み

「レザーアワードに応募するのは3回目。昨年までは、キャラクターや動物の緻密な造形を表現することに力を注いきました。今年5月に新しくオープンしたギャラリー併設の工房で、蔡弘灝(サイホンハオ)さんはそう話す。「本作では、シンプルに革自体の魅力を表現したいと考えました。そこで注目したのが、倉庫にたくさん眠っていた床革\*だったんです」。これまでにも、キャラクターブローチの裏面などに、床革を用いてきたという蔡さん。しかし使用量がそこまで多くないこと、さらには革を薄くすいてもらう際に出る床革もタダ同然で譲り受けることがあり、その多くが手つかずのまま残っていたのだ。「床革をよく見ると、つるつとしているものもあれば、少し繊維質に毛羽立っている部分もあったり。この表情を主役として生かしてみたいと考えました」。

受賞作品詳細は  
こちらへ



受賞者動画を  
配信中!



成形に用いたのは、輪積み法。これは、棒状にした粘土を回し置いて積層することで器形に成形する工法だ。「まず床革を水で濡らしてやわらかくし、棒状に加工。それをバランスボールの周りに巻き付けていきました。そして革が乾いて固まってから、バランスボールの空気を抜きます」。ベースとなる壺の形ができあがると、今度は表面のところどころに革のパーツを接着。その上からさらに床革を巻き付け、最終的に7層の床革を積み重ねたという。「そこから表面を削っていくことで、年輪のような独特の模様を表現しました。削ってみるとどんな見えになるかわからなかったので、今回一番苦労した工程ですね」。防水のため、中面には漆と地粉を混ぜたものを塗装。表面は部分的に漆を塗り、磨くことでツヤを出し、意匠のアクセントとした。

斬新なアイデアを、日本の伝統的な工法、材料で形にした、極めてユニークな作品だ。

\*銀面（表面の層）をもたない下層部の革

上／水を含ませやわらかくすることで、床革を造形しやすく。下／パレーボールサイズでつくった作品



いつか子どもたちにもつくってほしいという思いから、裁断した革と革を組み合わせてはめ込む手法を採用

## 仕事である端材を使用、環境配慮型のテディベア

革製品の製造・修理業を営む井藤憲一郎さん。受賞作の素材には、仕事である端材を活用している。

「仕事で革製品をつくっていると、結構な量の端材が出るんです。それらを消費するために、無理なくパーツ取りできるぬいぐるみは最適でした。また、いずれワークショップなどで子どもたちにつくってほしいと思っているので、工程はできるかぎり簡素化しました。針と糸を使わない縫製なしの製法であることに加え、有機溶剤や接着剤も一切使用していません」

細部にも並々ならぬこだわりがある。目のくぼみの表現や耳の立たせ方の工夫によって、テディベアならではの愛らしさを強調。また、首、腕、足に可動性を付与し、持ち主がより愛着を抱きやすいように仕上げた。

そもそもなぜ可動させたいのかと聞くと、

「やっぱり動いた方がかわいいじゃないですか」と、はにかむような笑顔を見せる井藤さん。受賞の知らせを受けた瞬間にについて、「じわりと溢れるものがありました」と振り返る。

「これまでコンテストに応募したことなく、受賞によって初めて人に認めてもらえたといううれしさがありました。個人的には、コロナ禍における買い控えなどの影響により、本業の受注依頼が減り、やむを得ずアルバイトを始めたという事情があった。そんな孤独な状況の中での受賞だったので、喜びもひとしおでした」

苦境に立たされていた井藤さんにとって、今回の受賞は一筋の光明となったようだ。

受賞後も作品の改良を考えており、「誰でもつくりやすいように、さらに工程を簡略化したいです」と語る井藤さん。「ハザイ×クマ」の制作キットが世に出回り、子どもたちが楽しげにつくる。そんな日が来ることを心待ちにしたい。

## Free フリー部門

### 井藤憲一郎さん

ITO Kenichiro

[ ハザイ×クマ ]

個人

## フューチャーデザイン賞

受賞作品詳細は  
こちらへ



受賞者動画を  
配信中！



## ジェンダーレスでエイジレス 害獣の革を使ったシューズ

製靴メーカーの代表取締役社長を務める安藤真弓さんは、全国各地で行われる催事への参加を重ねる中で、靴を求める人々のある傾向に気づくようになる。

「お客様はご自身の性別や年齢に沿う靴をお求めになる節があり、たとえば50～60代の女性なら、どれだけ履き心地がよくても『紳士用だから』『若者向けだから』という理由で敬遠されることが少なくありません。そこで線を引いてしまうのはもったいないとずっと思っていました」

そんな折、たまたま出向いた展示会で、害獣問題で処分された鹿の革と出会い、SDGsに取り組むきっかけを掴む。

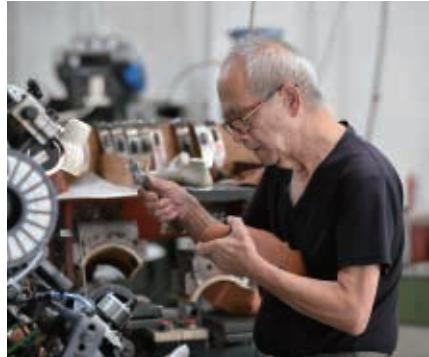
「その鹿革を取り寄せてサンプルをつくると、ソフトで軽く、丈夫でしなやかな靴が完成しました。その時に、この鹿革を使い、年齢や性別の垣根を超える靴をつくろうと決心しました」

害獣の革を使い、ジェンダーレスでエイジレスな靴を製造するというコンセプトは決まった。デザインはベーシックかつシンプルに。鹿革の特性を生かし、履き心地には徹底的にこだわり抜いた。熟練の職人たちと取り組んだ制作時の苦労について、安藤さんは次のように語る。

「もっとも大変だったのは、鹿革の風合いを壊さないようにすることでした。創意工夫の結果、ふんわりしたやわらかさとナチュラルなシボ感をそのまま生かすことができたように思います」

受賞作の「『ロス』から生まれた『レス』シューズ」は、着脱しやすいスリッポンタイプ。ソフトでなめらかな履き心地を維持しつつ、甲の内側にゴムを取り付けているので足抜けも防止できる。ただし、よりフィット感を重視するのであれば、紐タイプがおすすめ。しっかりと紐を結べば、ウォーキングなどにも使える。

新たな時代にふさわしい一足が、ここに誕生した。



同社の靴づくりの信条は、「足に優しく、人に優しい」。履く人の足の健康面にも配慮を行き届かせている



**Foot Wear フットウェア部門**

**審査員長特別賞（持続可能なデザイン）**

## 安藤真弓さん

ANDO Mayumi

[「ロス」から生まれた「レス」シューズ]

受賞作品詳細は  
こちらへ



受賞者動画を  
配信中！



株式会社 ティックワールド





**Students** 学生部門

最優秀賞

## 大場朝希さん

OBA Asaki

### [牛さんの爪サロン]

国際ファッション専門職大学



天然のキズが気になるなら…  
逆転の発想から誕生した、  
猫の爪とぎ

現在、国際ファッション専門職大学に通う4年生である大場朝希さん。今回の作品づくりのきっかけは、3年生の時に参加していたゼミのプロジェクトだった。「2021年に、レザーの卸売専門商社である富田興業株式会社さんと、私が所属していた平井秀樹教授のゼミが共同で立ち上げた『レザーレジエンスプロジェクト』。これは、流通時に一番下にランク付けされてしまう『D級』レザーを有効活用し、皮革業界における資源ロス問題に取り組むためのプロジェクトです」。そこで大場さんの頭にふと思いついたんです」。

当初は革を面で使って、そこに爪をとぎたくなるようなカッティングやパンチング加工を施したサンプルを作製。「でも、うちの猫で試しても全然反応を示さず……。そんな時に、富田興業の方がアイデアをくれたんです。革の端っこを生かしたらどうかって」。試作品には、革の古い見本帳に使用されていた小さな短冊状の革を使用した。これを縦にして木の箱の中に並べ込むと、断面の色合いも楽しい、斬新な爪とぎが完成した。

「動物が接するものなので、本番の作品で使った革は、すべて植物タンニンなめし。極力ナチュラルな原料を使った革を採用しました」。ボロボロになったらレザー部分だけを取り外し、新しいものに取り換えることが可能。色を替えることで、インテリアとしても楽しめる。木箱の蓋はD級レザーで化粧を施し、革のひも、レザーステッカーを貼ることで、贈答品にも最適な仕様に。若きアイデアの詰まった作品だ。



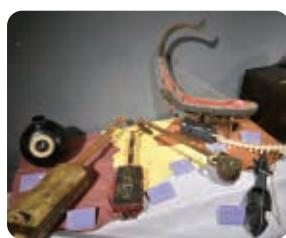
上／発想のきっかけとなった、愛猫のユキちゃん。下／インテリアとしても楽しめるよう配色を考えている

## 日本最大の レザープロダクト コンペティション

9月24日・25日の2日間、東京・渋谷ストリームホールにて、国内最大のレザープロダクトコンペティション「ジャパンレザーアワード2022」の応募作品展が開催された。

今年の応募作品は全242点。環境意識が高まる昨今だけに、サステナブルな視点が反映された作品が多く、審査員長の長濱雅彦氏は、「新たな世界の扉を開くきっかけになるような作品が集まった」と、高く評価した。実際に手で触れられる応募作の無料展示も活況を呈した。

別フロアでは、革のピンブローチの制作や革のコースターに刻印を打つワークショップも大盛況。また、「Leather World Music Concert」では、皮革を使った世界中の楽器が演奏され、聴衆を楽しませた。



今年初の試みとなる「Leather World Music Concert」。皮革を使用した珍しい楽器の演奏が人々を魅了した



### ジャパンレザーアワードとは

今年で15周年を迎えるジャパンレザーアワードは、国産のなめし革などを使用した作品を対象とする日本最大の革製品コンペティションです。革を用いた製品の、新たな可能性を見出すアワード、このアワードを通じて、新たな“発想・表現”的できる人材の発掘と育成に取り組んでいます。

Japan Leather Award <https://award.jlia.or.jp/>



